佐伯城跡三の丸確認調査
現地説明資料

日 時：令和７年５月25日（日）
10:00～11:00　14:00～15:00
主 催：佐伯市教育委員会社会教育課

●調査の目的

佐伯市教育委員会では、令和6年度から、史跡佐伯城跡を適切に保存・活用するための基本的な指針となる「史跡佐伯城跡保存活用計画」の策定に取り組んでいます。

計画において三の丸の保存と活用の方針を検討するために重要な要素である、佐伯城三の丸御殿の遺構の有無や状況を把握するため、確認調査を実施しました。

●佐伯城三の丸について

佐伯城は、佐伯藩初代藩主である毛利高政が、慶長7年（1602）から4年をかけて築いたとされる近世城郭です。中世以来の山城の構造と、近世初期に発達した石垣技術を融合して築かれた城郭であり、近世を通じて山全体を維持していくための工夫が残されている点が評価され、令和5年3月に国指定史跡となりました。

佐伯城の三の丸は、毛利高政（たかまさ）による築城時から設けられていたことは分かっています。しかし、初期の実態は不明で、現在のような形状の曲輪（くるわ）となったのは、3代藩主である毛利高直（たかなお）の代で、寛永14年（1637）に三の丸櫓門（やぐらもん）が設けられ、同じころに三の丸御殿が増築されたと考えられます。藩主の生活や政治の場となった御殿が置かれた三の丸は、佐伯藩において重要な役割を果たしていました。

明治時代を迎えると、佐伯城の山頂の建築物は全て解体されたと伝わります。三の丸御殿は、役所の庁舎や学校などとして利用されながら、少しずつ解体が進みました。、昭和46年（1971）には、最後まで残されていた玄関と御広間（おひろま）・御使者之間（ごししゃのま）などが、佐伯文化会館建設のため船頭町に移築されました。移築後は住吉御殿と呼ばれ、現在も利用されています。三の丸に建設された佐伯文化会館は、大分県南の様々な文化芸術活動の拠点となり、令和3年に解体された後は、その基礎が残っています。

●調査の成果

佐伯城三の丸御殿については、江戸時代末頃の様子を描いた絵図「三御丸五歩壱間之図（さんのおんまるごぶいちけんのず）」（以下、「絵図」）があります。この絵図と現況の測量図を重ね、佐伯文化会館の内側と外側に調査か所（トレンチ1、トレンチ2）を設定し、発掘調査を実施しました。（図1）

１）トレンチ１の成果

トレンチ1は、佐伯文化会館の内側に 8m×8mの規模で設定しました。三の丸御殿の御使者之間・御入側・御祐筆部屋の位置にあたります。また、御殿のこの部分は、のちに船頭町に移築され、住吉御殿として現存しています。

佐伯文化会館の基礎を一部撤去して調査を行った結果、地中梁の内側に掘削を免れた部分があることが明らかとなり、ここから礫の集中を3基検出しました（写真1・2）。

陶磁器の出土が見られなかったため、正確な時期の推測は困難ですが、これらの礫の集中は、住吉御殿の基本的な柱間隔と同じ約2mの間隔をあけ、地面を掘って礫を充填しています。さらに、絵図に描かれる柱の位置とも概ね一致することが分かります（図2）。

これらの柱は、本来は礎石に乗っていたはずですが、トレンチ内では礎石や、礎石が据えられていた当時の地表面は失われていました。今回検出した礫の集中は、御殿の御入側や御祐筆部屋のいずれかの基礎のうち、礎石の沈下を防ぐ根固めであると考えられます。

こうした成果から、文化会館の地下には、地中梁の内側に御殿の遺構が残されている可能性が高いことが判明しました。

２）トレンチ２の成果

トレンチ2は、佐伯文化会館の外側に 5m×10mの規模で設定し、さらに 2m×10mの範囲を拡張して調査を行いました。三の丸御殿のうち、台所や使用人の部屋がある「奥向き」の出入口周辺にあった、受払所と隣接する物置や土間、それらを囲む水路などにあたる位置です。

調査の結果、文化会館建設時の盛土の下から、並行した2列の直線状の石垣を検出しました。（写真3・4）トレンチの北西側は、建設時の掘削や配管の埋設によって壊されてしまっていますが、絵図に描かれる水路の位置と非常に良く一致しています（図3）。また、水路の内部や周囲の整地層からは、少数ながら18世紀後半～19世紀頃の陶磁器片が出土しています。これらの点から、検出した石垣は御殿を囲む水路であると考えられます。

さらに、平らに揃っている石垣の天端は、当時の地表面の高さを示すものです。トレンチ2の周囲には、江戸時代終わり頃の遺構が良好に残されている可能性があります。

●まとめ

今回の確認調査によって、佐伯文化会館の内側・外側ともに、江戸時代の三の丸御殿の遺構が残されていることが判明しました。特に、トレンチ2の周辺では当時の地表面を含む、良好な状態で保存されている可能性もあります。

今回の調査成果を受け、「史跡佐伯城跡保存活用計画」の検討においては、地下に遺構が残されていることを前提として、それらを適切に保存し、史跡の理解のために活用するための方針を検討して行く予定です。

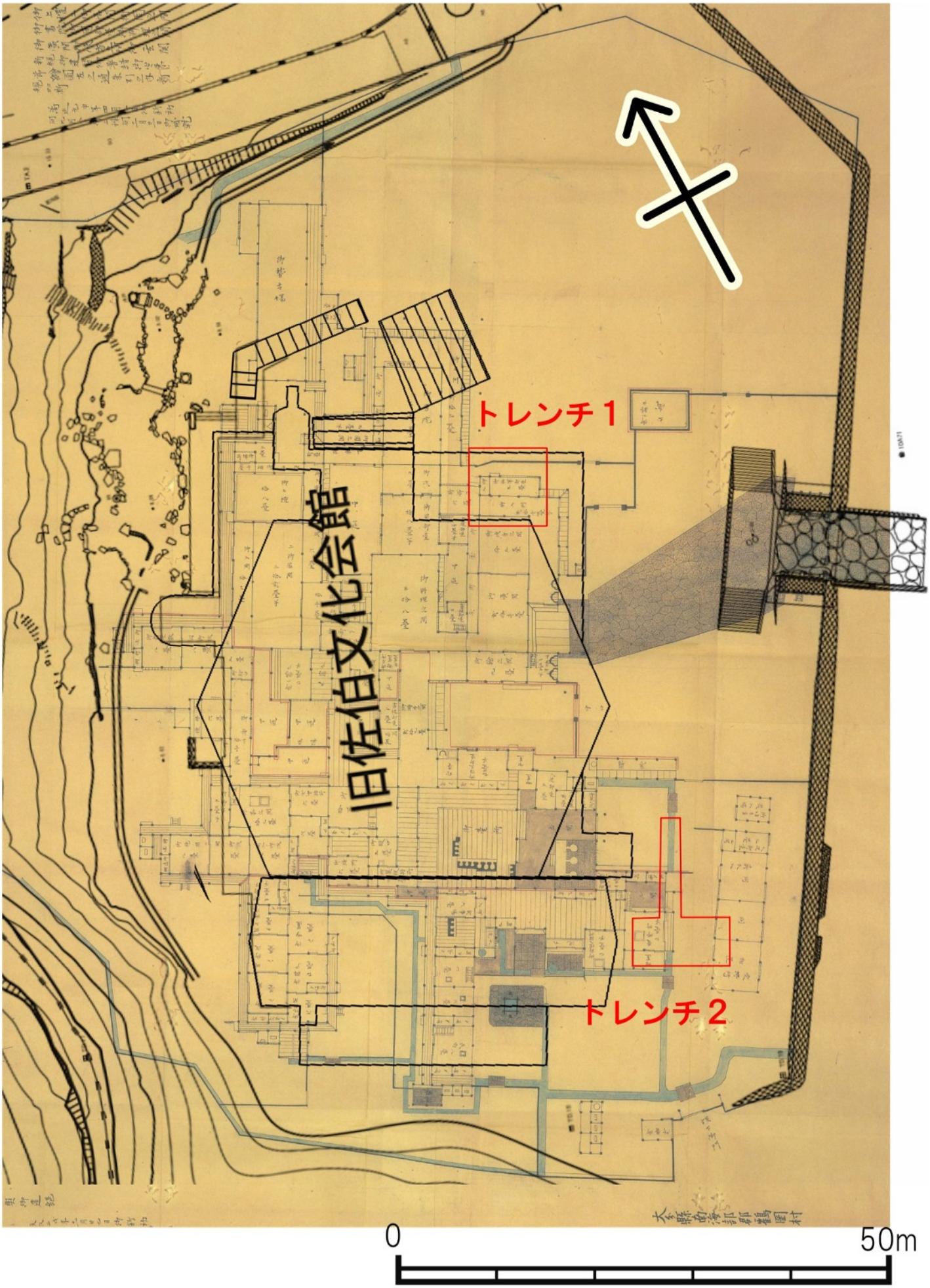
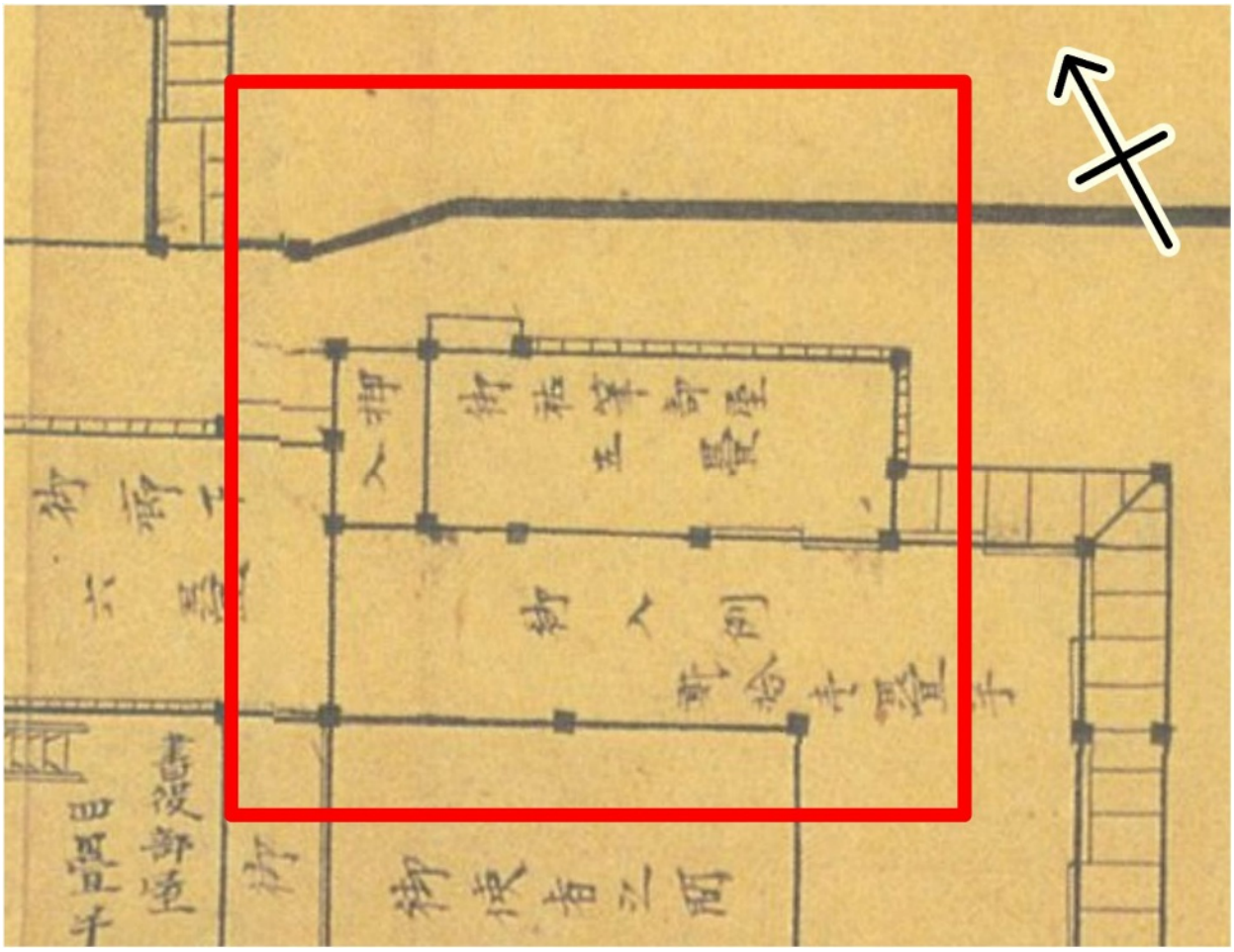


図１　三の丸確認調査トレンチ配置図（S=1/500）

写真１　トレンチ１遺構検出状況（南東から）

写真２　礫の集中部の断面（北西から）



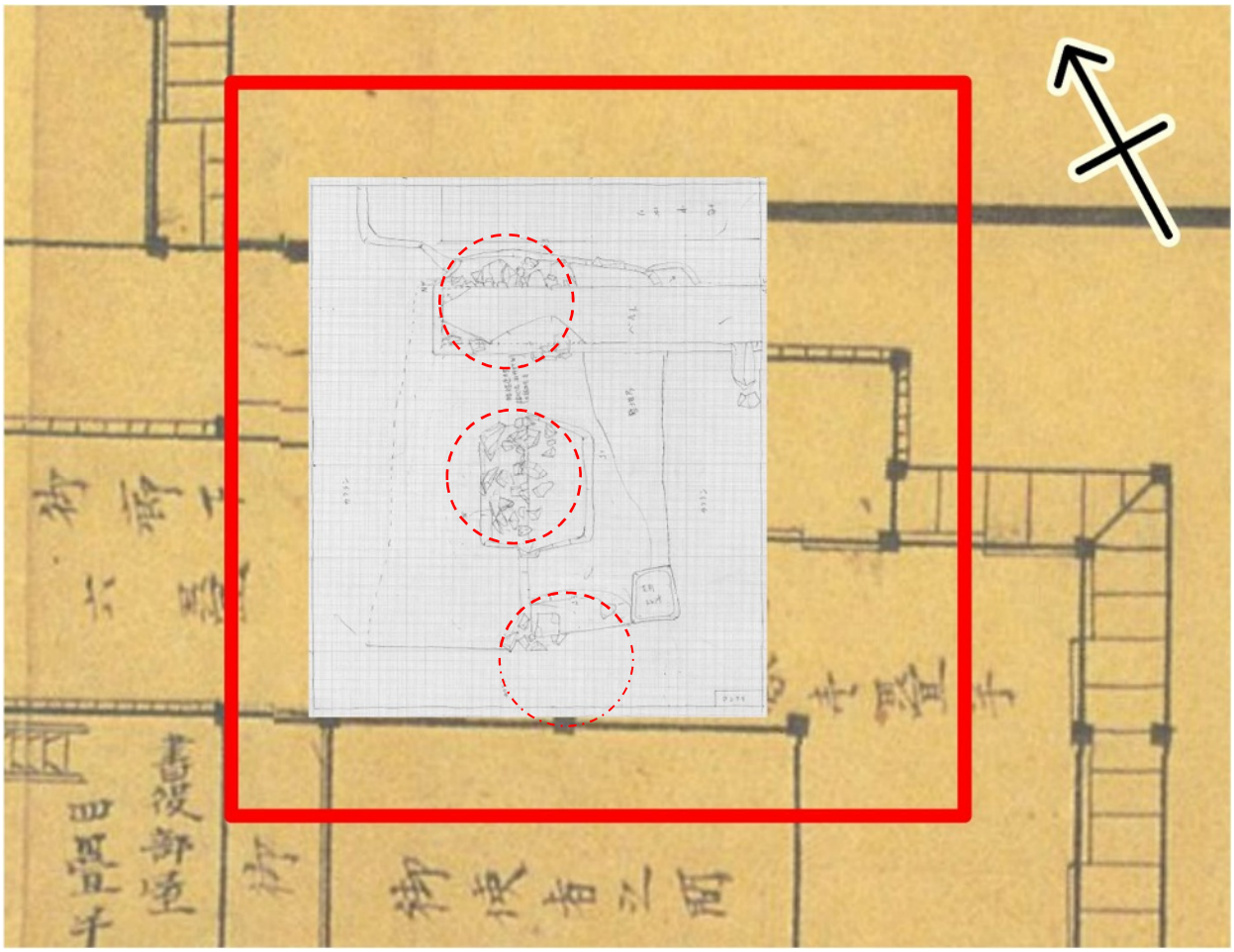


図２　トレンチ１の想定位置（上）と検出遺構（下）（S=1/80）

写真３　トレンチ２遺構検出状況（南西から）

写真４　水路の石組み（西から）

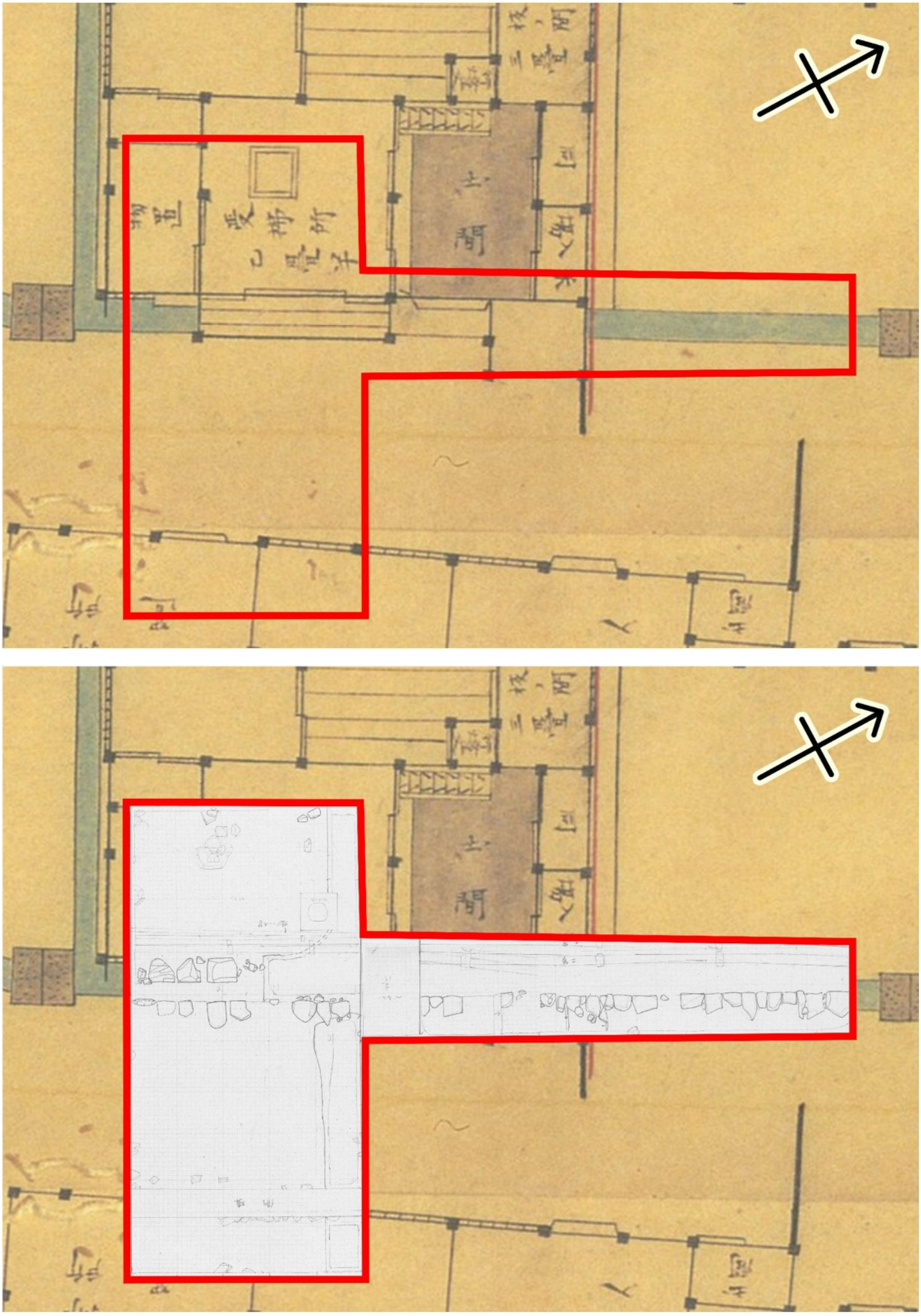


図３　トレンチ２の想定位置（上）と検出遺構（下）（S=1/100）